中露再接近の背景
(SU-35 特集：SU-35 の対中輸出と米露関係)

漢和防務評論　平可夫

（訳者コメント）
漢和防務評論 NET 版 6 月号の記事から、最近の中露再接近に関する記事を紹介します。
中国がロシアから先進型の SU-35 や S-400 型 SAM、LADA 型潜水艦を購入しようとしており、それが実現しそうな背景に米露の角逐があるとしています。それが事実とすれば、米露の対立を利用して、中国は従来入手出来なかったロシアの先進技術を獲得するチャンスが来たと言えます。
作者の平可夫氏は、ロシアの情報源からロシアから見た中露再接近の背景を分析しています。

ロシアは、SU-35 戦闘機や LADA 型潜水艦等のハイテク兵器を中国に輸出しようとしている。これはオバマの対露外交が基本的に失敗したことを意味する。オバマの対露外交は、ロシアを政治及び外交面で中国に接近させ、中露を戦略的パートナーの関係に導いた。今後、モスクワと北京は、対外戦略の面で一致した姿勢を採る可能性がある。

ロシアの対中武器輸出の歴史を見ると、米露の関係が好転し、或いは関係良好な時期は、両国の武器貿易は低調であった。ロシアが中国に輸出する武器の技術水準は、指導者によって相当大きな影響を受ける。例えば、1992 年、米露はエリチンが述べたように”同盟”の時代であり、当時のロシアは資金が欠乏していたにもかかわらず、中国に輸出した武器の水準は周辺国に輸出する武器よりもはるかに低かった。特にインドに比較してはそうであった。ロシアが中国に輸出した SU-27SK 型戦闘機はスタンダード型であり、付随する武器システムは輸出しなかった。

その後、ロシアの対中輸出武器の技術水準は、高い時も低い時もあったが、全体的に見てエリチン時代は、ロシアが EU に加盟できるとの幻想が依然存在していたため、西側の政策を重視し、ロシアが中国にハイテク武器を輸出することはなかった。たとえプーチン時代が早期に実現したとしても、ロシアには EU 加盟への期待が依然として存在していたので、対中武器輸出がある程度制約を受けていた。

その後 1999 年から、米露関係は、地域的問題、政治、外交戦略で大きな対立が生まれた。バルカン戦争、NATO の東方拡大と中央アジア進出はプーチンの対米外交を高度に緊張させた。この時期に SU-30MK2 及び SU-30MKK 等、性能の優れたロシア製武器が中国に輸出されたのである。

メドベージェフが大統領の時代は、彼自身西側に好感を持っていたことから、米露関係はやや緊張が緩んだ。その上、中国が違法にロシア製武器を大量コピーしたので、中露の軍事協力関係は 2005 年から停滞し、毎年中国に輸出される軍事装備品は数種類のエンジンのみになった。

多くの西側アナリストは、メドベージェフ大統領をプーチンの傀儡に過ぎないと見ているが、本誌はそのようには見ていない。ロシアの権力闘争には特性がある。国内の重要人事、政治路線等の問題は、依然プーチンが支配している。しかし外交、軍隊建設等、小範囲の領域ではメドベージェフが自らの権力を行使している。そうでなければ、プーチンとメドベージェフが十数年間も共同協力できるはずがない。

2012 年、大統領に当選後、プーチンは米露及びロシア EU の間の新たな試練に直面することになった。ロシアは、多くの国際問題で中国の協力が必要になった。米露関係の冷淡さは、オバマ大統領のプーチン当選に対する祝賀表示の遅れなどに見ることが出来る。プーチンは、昨年 6 月の 8 ヶ国サミットに出席しなかった。西側指導者たちのプーチンに対する冷たい態度を見たくなかったのであろう。

過去 2 年を振り返ると、一連の国際環境の変化によって中露双方は多くの問題で協力する機運が高まってきた。第一は、米国が積極的に主張する欧州及びアジアにおける弾道ミサイル防御システム建設の問題であり、この問題で中露は従来から政策が一致していた。

特に米国は、ポーランド、チェコ、ル―マニアにレーダー及び迎撃ミサイルを配備しようとしたため、弾道ミサイル防御問題は、プーチン大統領の最初の任期中における米露関係の最大の障害となった。この問題は、2013 年に暫時棚上げされたが、その理由は米国の政治的譲歩ではなく、米国の予算不足であった。

またアジアにおける弾道ミサイル防御システム建設を巡る衝突は、すでに中露と日米の 4 国関係に波及している。なぜロシアの日本に対する外交姿勢がます

ます強硬になっているのか、根本原因はここにあると本誌は分析している。アジアにおける弾道ミサイル防御システムは、極東地区の安全保障戦略に大きく影響する。安倍政権は、すでに米国との SM-3 BLOCKⅡ/ⅡA システムの共同開発を明確に表明した。このシステムは、長距離弾道ミサイル迎撃能力がある。2012 年に最初の試験を行った。2018 年には配備が期待される。また更に一定程度大陸間弾道ミサイル迎撃能力を付与する可能性が極めて高い。(BLOCKⅡB の飛行速度は 6.5 KM/秒に達している)

したがって次の段階では、日米によるアジア版弾道ミサイル防御システム配備に中露が共同して対抗するであろう。これは大国同士のせめぎ合いの鍵となろう。

次は、地域外交の主導権争いであるが、米露の争いは厳しさを緩めてはいない。2000 年代早期に比べ、激烈さを増している。典型的な地域はシリアである。ロシアは今回アサド政権を強力に支持した。さらに中国及びロシアがシリア問題への姿勢を高度に一致させていることは衆目が認めている。米国の前国務長官ヒラリー氏は、中露のシリア問題に対する姿勢を何度も批判している。

今回ロシアの軍事的支援があったからこそ、アサド政権は現在に至っているのである。シリアは冷戦時代からモスクワの盟友であり、ロシアは地中海で唯一の海軍基地をシリアに設けている。ロシアはシリアを放棄することは不可能である。ロシアの海軍基地は、中東情勢全体と中東外交に対するロシアの発言権に影響を与える。

米露間の不信感は、国家の核心利益以外の末節部分でも影響を及ぼしている。例えばプーチンが再度大統領に当選後、米国への養子縁組禁止法案に署名した。しかし米国はその前にロシアの人権に関わる MAGNITSKY 法案を制定している。

次の地域戦略主導権争いは、イランの核開発をめぐる問題である。中国及びロシアは、従来から全面制裁による解決方式に反対してきた。ロシアと中国は、イランへの主要な武器輸出国である。中国は、イランの石油資源に大きく依存している。

上述のごとく、近年来、中露は、主要な国際問題において外交姿勢が完全に一致している。上述の重要な外交及び国家安全保障上の利益に比較すれば、ロシ

ア製武器のコピー問題など小さな問題である。

米露の関係が完全に改善されなければ、中国とロシアの戦略的、軍事的協力関係は深まる。次の段階では、日米の SM-3 BLOCKⅡシリーズ弾道ミサイル防御システムの配備に従って、中露の軍事協力はさらにエスカレートする可能性がある。直接的影響は、中国の S-400 防空ミサイルの取得が容易になることであろうか。

以上